

<研究報告>

高校生の性と性教育に対する教員の意識

植谷 亜希子¹⁾, 篠木 絵理²⁾, 藤井 可苗³⁾, 阿保 順子¹⁾, 横井 寿之⁴⁾

抄録：本研究の目的は、高校生の性および性教育に対する高校教員等の意識を明らかにすることである。北海道内の公立・私立高等学校、予備校に勤務する教員等70名を対象に高校生の性および性教育に関する質問紙調査を実施し、以下の結果を得た。

- 1) 高校生の性について、50%以上の教員が問題と思う項目は、性行動の低年齢化、性感染症の増加、性情報の多様化であった。
- 2) 高校生からの性の相談を受けたことがある教員は46.6%であり、具体的な相談内容は、多い順に男女交際、妊娠、人工妊娠中絶であった。また、高校生からの性に関する相談をうけたくない・どちらともいえないと回答した教員は約90%であり、その理由として、対応に自信がない、(対応に)時間がかかるなどがあげられた。
- 3) 教員が考える性教育実施の適任者は、母親、父親、教師、養護教諭の順に多く、性教育内容として示した20項目全てについて、80%以上が教えるべき・教えたほうがよいと回答した。

以上の結果から、教員は、高校生からの性の相談を受ける機会は少なくないが、性の相談および性教育に対して消極的姿勢であることがうかがえた。また教員は、性教育実施の適任者として両親をあげており、性教育に対しては家庭教育に依存的であることがうかがえた。

キーワード：思春期、性教育、教員、性の問題

I. はじめに

現代の思春期の性に関する問題点として、性的経験率の上昇、性的経験の早期化、女子の性行動の活発化があげられており、その背景として、若年層における情報化の進展による性情報の増大が指摘されている¹⁾。また、母子保健の主なる統計(2008)によれば、20歳未満の人工妊娠中絶実施率は、2001年の13.0をピークに減少傾向を示しているものの、地域格差の問題も指摘されており、今後も取り組むべき課題とされている²⁾。さらに、感染症発生動向調査によると、10代の性感染症罹患率は近年減少傾向が続いているものの、STD (Sexually Transmitted Diseases) 6疾患(梅毒、HIV、性器クラミジア、淋菌感染症、性器ヘルペスウイルス感染症、尖圭

コンジローマ)すべてで10代前半の報告が認められていることから、中学生の段階からSTD予防教育が重要であることが示されている³⁾。このような現状をふまえて、「健やか親子21」における主要課題の1つとして「思春期の保健対策の強化と健康教育の推進」があげられ、思春期教育の量的拡大や質的転換と共に、学校・家庭・地域の連携の充実が求められている⁴⁾。

我々は、学校・家庭・地域の連携による思春期健康教育のあり方を検討している。そこで、本研究では、高校生の性および性教育に対する教員の意識を明らかにすることを目的に調査を行った。

II. 研究方法

1. 対象者

北海道内の公立・私立高等学校、予備校に勤務する教員で、性感染症に関する講演の参加者を対象とした。

講演は、高等学校主催の教員研修会および大学主催の高等学校・予備校教員対象の入試説明会における研究活

1) 北海道医療大学 看護福祉学部

2) 東京医療保健大学 医療保健学部

3) 関西福祉大学 看護学部

4) 社会福祉法人 当麻かたるべの森 副理事長

動紹介として、筆者自身が実施した。講演内容は、1) 性感染症とは(主な性感染症の種類、症状、感染場所、治療)、2) 性感染症の動向(性器クラミジア感染症、性器ヘルペスウイルス感染症、尖圭コンジローマ、淋菌感染症、HIV/AIDS)、3) 性感染症の背景(性行動の低年齢化・活発化、若年妊娠・人工妊娠中絶、知識と行動の不一致について)であり、講演時間は60分～90分の範囲であった。

2. 調査方法

講演終了時に無記名自記式質問紙を配布し、当日回収した。調査期間は2005年5月～6月であった。

3. 調査内容

先行研究を参考に、高校生の性および性教育に関する教員の意識に関する全9項目の質問紙を作成した。内容は、基本属性3項目(年齢、性別、性教育関連科目担当の有無)、高校生の性の問題に対する考えについて1項目、高校生からの性の相談経験・相談内容について3項目、高校生への性教育に対する考えについて2項目で、回答は主に選択式とし、一部自由記載を含めた。

4. 分析方法

選択問題は、項目毎に単純集計した。自由記載は項目毎に内容を分類し整理した。

5. 倫理的配慮

質問紙には、研究の趣旨、調査結果を統計的に処理すること、個人の回答がそのまま公表されないことがないことなどを記載すると同時に、質問紙配布後、口頭でも説明し、任意で協力を依頼した。回答後の質問紙の提出をもって同意とみなした。

Ⅲ. 結 果

質問紙は、70名中に配布し、60名から回答を得た(回収率85.71%)。60名全てを有効回答とし、質問項目毎に欠損値を除外した上で分析した。

1. 対象者の概要

基本属性については、60名から回答を得た。性別は男性48名(80%)、女性12名(20%)、年齢は20代～50代の範囲で、40代が26名(43.3%)と最も多かった。現在、性に関する内容を含む科目を担当している者は17名(28.3%)、担当していない者は43名(71.7%)であった。

2. 高校生の性の問題に対する意識(図1)

高校生の性について問題と思うことを7項目からの選択式(複数回答)で質問し、56名から回答を得た。その結果、高校生の性について50%以上の教員が問題と思う項目は、「性行動の低年齢化」40名、「性感染症の増加」37名、「性情報の多様化」33名であった。性の問題の項

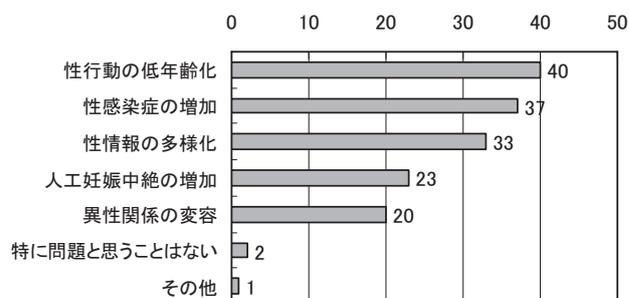


図1 性について問題と思うこと(複数回答)(n=56)

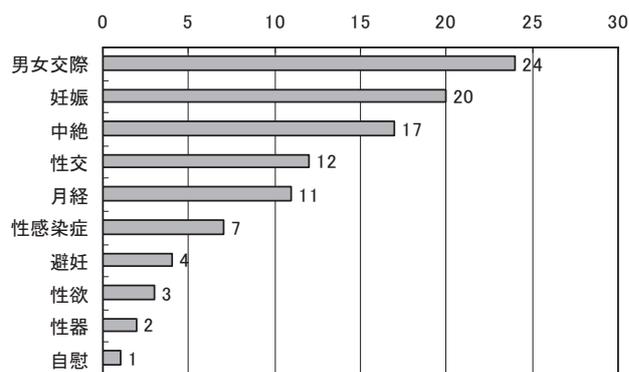


図2 性に関する相談内容(複数回答)(n=40)

目別に、問題と思う理由についてもたずねた。「性行動の低年齢化」については、「知識がないまま性行動に走り、様々な問題に巻き込まれる可能性が高い」「知識と行動のバランスがとれていない」「(性行動の低年齢化により)招いた結果が不幸になるケースが多い」などがあげられた。「性感染症の増加」については、「不妊症の問題」「実態は不明だが、生徒の中にも感染した子がいた」などがあげられた。「性情報の多様化」については、「インターネットの普及による性情報の入手の容易さ」「マスメディアなどから多様な情報が簡単に手に入る」「正しくない情報、ゆがんだ情報が多い」「誤った情報を信じている」などがあげられた。「人工妊娠中絶の増加」については、「ほとんどが中絶している」「簡単に考えている」「中絶に対する意識が低い」などがあげられた。「異性関係の変容」については、「同世代での健全な関係がない」「簡単に付き合い始める」「付き合ってからセックスするまでの期間が短い」「付き合う、別れた、の話が常に聞こえてくる子が多くなったように感じる」などがあげられた。

3. 高校生からの性の相談経験・内容(図2)

高校生からの性の相談経験については、58名から回答を得た。その結果、「相談を受けたことがある」は27名(46.6%)、「相談を受けたと聞いたことがある」は14名(29.3%)、「相談を受けたことも聞いたこともない」は17名(24.1%)であった。具体的な相談内容(複数回答)について、11項目からの選択式(複数回答)で質問し40名から回答を得た。その結果、多い順に「男女交際」24名、「妊娠」20名、「人工妊娠中絶」17名であっ

た。また、性に関する相談を受けたいと思うかという質問に対しては、49名から回答を得た。その結果、「はい」が5名（10.2%）、「いいえ」が12名（24.5%）、「どちらともいえない」が32名（65.3%）であり、「いいえ」「どちらともいえない」の理由として、「どう説明するか迷う」「対応に自信がない」「時間がかかる」「性に関することは、基本的に家庭の責任と思う」などがあげられた。

4. 高校生への性教育に対する意識（図3、4）

性教育は誰が行うべきかについて、7項目からの選択式（複数回答）で質問し、60名から回答を得た。その結果、「母親」49名、「父親」46名、「教師」37名、「養護教諭」34名の順に多かった。また、性教育内容については、20項目の内容を提示し、「教えるべき」「教えた方がよい」「教えるべきでない」の4段階のリッカート方式で選択してもらったところ、54名から回答を得た。その結果、全20項目について、80%以上の回答者が「教えるべき」「教えたほうがよい」と回答した。一方、「教えるべきではない」という回答があった項目は、「月経のしくみ」「射精のしくみ」「男性と女性の心理や行動の違い」「性は人生にどういう意味を持つか」「各避妊方法の使い方」の5項目で、「教えない方がよい」という回答は、「性感染症の治療法」以外の19項目にあり、多いのは「性感染症の検査方法」「人工妊娠中絶の方法」であった。

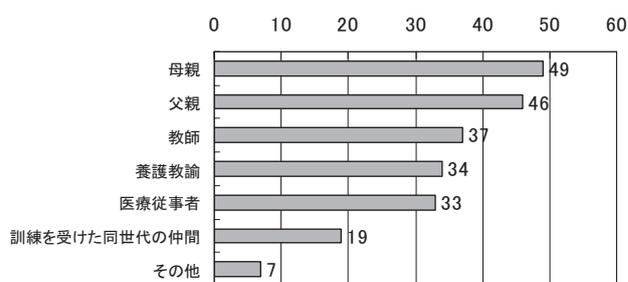


図3 性教育は誰が行うべきだと思うか（複数回答）（n=60）

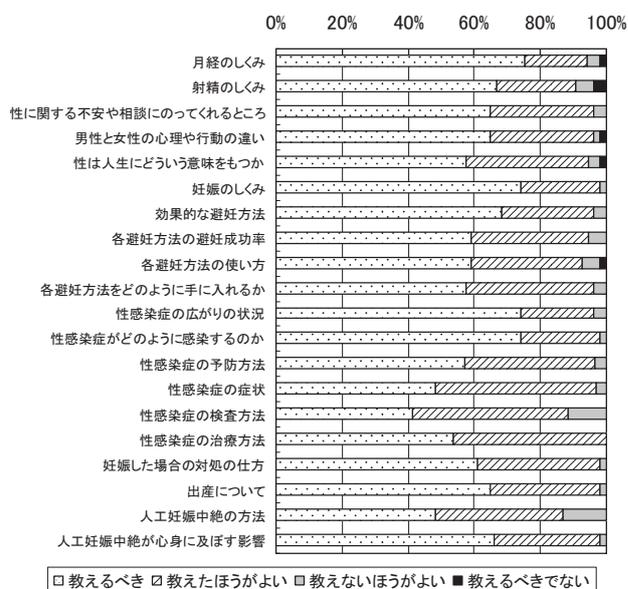


図4 性教育内容に対する考え（n=54）

IV. 考 察

1. 高校生への性教育に対する意識

教員は、性行動の低年齢化、性感染症の増加、性情報の多様化を、高校生への性問題と捉えていることが示された。また、問題別に問題と思う理由について質問したところ、（様々な）問題に巻き込まれる、不妊症の問題など、それぞれの問題に連鎖されることを危惧しており、日常的に高校生と接している経験から問題として実感している様子が見られた。

2. 高校生への性教育に対する教員の関わり

教員は、高校生からの性の相談を受ける機会が少ないことがわかった。しかし、高校生への性の相談および性教育に対しては、「どう説明するか迷う」「対応に自信がない」など、自信のなさがうかがえた。鈴木らの調査⁵⁾からも、高校教員が性教育に対して自信がないことが示されており、本研究でも同様の結果が得られた。また、渡會らの調査⁶⁾では、教職員が性教育の必要性を感じながらも過去3年間に性教育を実施しなかった理由として、「指導が難しい」が多かったと報告している。教員は、高校生にとって日常的に関わる身近な存在であ

る。従って、教員が自信をもって高校生の性の相談や性教育に取り組めるように、教員への支援体制を検討する必要がある。

3. 高校生への性教育に対する意識

性教育内容として提示した20項目全てについて、80%以上が「教えるべき」「教えたほうがよい」と回答していることから、高校生への性教育として教えるべき内容について、教員の意識に大きな差はないことが示された。しかし一方で、「教えるべきではない」との回答が5項目、「教えないほうがよい」との回答が19項目であったことから、数名の教員の性教育に対する消極的な姿勢がうかがえた。「教えるべきではない」「教えないほうがよい」と回答された項目については、そう考えた理由についても調査する必要があるだろう。

また、教員は、性教育を実施する適任者として母親、父親を多くあげていることから、性教育は教員の役割として位置づけられておらず、家庭教育に依存的である傾向がうかがえた。このことは、前項の高校生からの性の相談を受けたくない・どちらともいえない理由の中で、「性に関することは、基本的に家庭の責任と思う」という意見があったことからその傾向がうかがえる。小川

らが思春期の性教育について行った教員への意識調査⁷⁾の中で、「学校がすべてでなく、家庭で親が性教育を伝える必要がある」という教員の要望が多いことが報告されており、本研究も類似した結果であった。しかし性教育は、学校、家庭、地域が連携して行うことが期待されている。今後は、性に関する家庭教育の現状を把握した上で、高校生の性教育における学校、家庭、地域の連携と具体的な支援策を検討することが課題であろう。

文 献

- 1) 財団法人日本性教育協会編：「若者の性」白書－第6回青少年の性行動全国調査報告－，小学館，2007.
- 2) 財団法人母子衛生研究会編：母子保健の主なる統計平成20年度刊行，母子保健事業団.
- 3) 岡部信彦・多田有希：発生動向調査から見た性感染症の最近の動向，日本性感染症学会誌，19（1），2008.
- 4) 厚生労働省，健やか親子21検討会報告書，http://www1.mhlw.go.jp/topics/sukoyaka/tp1117-1_a_18.html（2009年9月）
- 5) 鈴木康江・佐々木くみ子・片山理恵・前田隆子：思春期性教育活動に向けての基礎調査－中学生，保護者，教師の意識調査から－，母性衛生45（4），512－517，2005.
- 6) 渡會睦子：小・中・高等学校生における性の実態と教職に見る性教育の現況，日本性科学学会雑誌，21（1），39－45，2003.
- 7) 小川久貴子・久米美代子・村山より子：思春期の性教育に関する教員の意識調査－静岡県A町公立中学校において－，日本ウーマンズヘルス学会誌，3，53－61，2004.

Attitude of high school teachers to the sexuality and sex education

Akiko TSUCHIYA¹⁾, Eri SHINOKI²⁾, Kae FUJI³⁾, Junko ABO¹⁾, Toshiyuki YOKOI⁴⁾

-
- 1) Health Sciences University of Hokkaido
 - 2) Tokyo Healthcare University
 - 3) Kansai University of Social Welfare
 - 4) Social Welfare Corporation Tōma Katarube